



授業、探究、地域連携： 学びを進化させる

— 今できること、今だからこそ考えたいこと

休校、分散登校、ソーシャルディスタンスの確保という困難な状況が続くなか、生徒の学びを止めないために、「授業」「地域連携」「探究」は、どのように取り組み、先生方の関わりはどうすればいいのでしょうか。それぞれの領域の専門家に、今後への影響や可能性について伺いました。

授業・生徒との関わり

石井英真

(京都市立大学大学院教育学研究科 准教授)

授業のオンライン化は、これまでの授業を再認識し、問い直すきっかけに。つながりの中で学ぶことこそ、学校の教育の本質ではなかったか

オンライン化で見えてきた 授業で大切にできたこと

3月の休校以降、子どもたちや保護者のみならず、先生方も大変な苦労をされてきたと思います。誰も見通しを示せないなか、せっかく組み直したカリキュラムは休校延長で白紙になり、できることから始めようと

LINEやZoom等で生徒とつながるにも、セキュリティなどの問題を指摘された途端、ご破算に。そうしたなか、手づくりで授業の配信にこぎつけた学校も、消費者意識の強い保護者の目にさらされ「毎日が授業参観」のようなプレッシャーを受けてしまうことも。

コロナ以前からあった、学校を縛る鎖が、ますます現場を委縮させ、硬

直化させてしまっているとしたら、とても残念です。しかも、そうした現場の苦労は外部には見えづらく、不安や不信の連鎖のなかで「学校の授業なんて」と思われかねないことに、私は強い危機感を覚えました。

授業のオンライン化の流れは逆に、「つながりの中で学びを実現する」という、これまで日本の学校教育が大切



授業・生徒との関わり

石井英真（京都大学大学院教育学研究科 准教授）

にしてきた授業の良さを再認識させてくれたと思っています。

同時に、これまでの授業を問い直す、またとない機会を与えてくれたとも感じています。例えば、「教えたからといって、学んでいるとは限らないこと」「授業を進めることと、学びを保障することは違うこと」「学力を定着させるためには、学び手の目線に立った組み立てや支援が大切なこと」等々。そうしたことに気づかないままでは

と、旧式の学習観に基づく一斉授業を、オンラインでもそのまま届けるというワナに陥ってしまうでしょう。それは、一方通行の大規模講義や機械的なドリル学習と同じであり、それこそ間違ったメッセージを生徒や社会に与えてしまうと思います。

オンライン授業のポイントの二つは、オンラインを使いつつも、オフラインで生徒の学びをどれだけ充実させるかです。学びを進めていくためには、実

は立ち止まったり、揺さぶられたりする経験が重要です。オンラインでポイントを絞ったサポートをしつつ、オフラインでの自習を充実させる。教師から教わりつつも、教わることから卒業し、自律的に学び続けていく。こうした、主体性をどう育むかという課題は、これまでの授業でも問われてきたわけで、古くて新しい問題を提起しているといえるのです。

デジタルメディアを活用し 学びや生き方にまでつなげる

デジタルメディアには、効率化、質の追求、機会の拡大といったさまざまな機能がりますが、個別最適化などの手法先行や、テクノロジー先行の「キラキラツール」としての導入が進むと、あたかも万能薬のように映り、「もう学校の授業は必要ない」という誤解を招く恐れもあります。

ところが今回、遠隔授業という、形式としてはむしろレトロな形で現場に普及したことで、従来の授業との対比がしやすくなり、互いの良さが浮き彫りになったと思います。

デジタル環境が強力に整備されるこ

とは、遠隔地や病院から通学するなど、今までカバーしきれていなかった生徒の学びの保障や機会の拡大にもつながっていくでしょう。また、学校外のリアルな現場と直接つながること、オーセンティックな学びも可能になります。大人たちのコロナへの対応やそれをめぐる議論にアクセスし、高校生目線で意見を発信するといった社会参画も容易になるはずです。

今の状況は人類史に残る大変な社会的経験です。何を感じ、どう考え、行動したかを各自が日記に残すだけでも、ちょっとした歴史の資料になるくらいの出来事だと思います。

そうした貴重な経験の一つひとつを学びに変え、人間的な成熟につなげていく。子どもたちに今、何が起きている、何を考えているのか、ということを確認していく。そのためには学びの履歴を子どもたちが残していく必要があり、そのとき教師に必要なのが丁寧なノート指導であり、ポートフォリオ指導などです。学びを可視化し、自分の中にきちんと落とし込んでいくよう促し、サポートすることが求められるわけです。



教師の学びと生徒の学びは相似形 「つながり」の中で、 共に学びを生み出していく

修得主義に寄せつつも 履修主義のもつ良さを維持する

授業時数の確保もままならない状況では、「何をもって学びを保障したと言えるのか」といった議論になることもあるでしょう。そのとき、心に留めておきたいのが「修得主義」の発想です。これは算盤や水泳の進級試験のように一定の基準をクリアすれば良しとする考え方。ただし、それだけでは「過程は問わないのか」「技能の獲得ならいかが、授業の意味ってそれだけなのか」という指摘にも表れるように、学びが矮小化される恐れもあります。対して「履修主義」とは、一定時間、授業を受けたり学校生活を送ったり

つながりや宛名のあるやりとり から学びは生み出されていく

今後、考えられる第2波・第3波や、

いしい・てるまさ ● 京都大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。学校で保障すべき学力の中身とその形成の方法論について理論的・実践的に研究。『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』(日本標準)、『中教審「答申」を読み解く』(日本標準)、『授業づくりの深め方:「よい授業」をデザインするための5つのツボ』(ミネルヴァ書房)など著書多数。現在、京都大学大学院教育学研究科 准教授。

分散登校を考慮すれば、遠隔での授業を一時的なものとして捉えず、主・従の関係はあるとしても、ハイブリットでの運用を標準とせざるを得ません。

そのとき考えなくてはいけないのが、不安を抱えている子どもたちに、どれだけ寄り添い、学びをつないでいけるかです。「遠隔〓オンライン」とは限りません。SNSがない時代にも遠距離恋愛があったように、電話だろうが文通だろうが、離れたところにいる誰かの心に寄り添い、つながることはできるわけです。宛名のあるやりとりを通じて、「学校の良さって、つながりの中で学びを生み出していくことなんだね」「つながりが学びを支えるんだな」ということを生徒、そして教師自身が再確認できればと願います。

オンライン授業という点では、既に存在する優れたコンテンツも活用しながら、所要所で先生と生徒たちが共に過ごす機会をもつ。そうした心のつながりのある学びのシステムこそ、これからの教育基盤として必要だと思えますし、それは、学級をつくりながら授業をつくり、皆で学びを深めていくことを大切にしてきた、日本の教育文化の良さを再確認することにもつながるでしょう。

たとえコロナ禍が収束したとしても、揺り戻しの動きに流されることなく、

休校中に感じたであろう「つながりた」という想いを恒久化させていく。「学校とは何か」「授業とは何か」を問い続け、学びの在り方を考え続けることが求められると思います。

先生方の挑戦が生徒に影響を 与え、未来の学校が立ち上がる

学びの当事者は誰かといえばもちろん生徒であり、この状況で生徒を子ども扱いしないことです。高校生であれば、学校や授業の在り方を一緒に考えていくこともできるはずだし、例えば「こういうことから始めようと思うんだけど、良いアイデアはないか」と持ちかけたならば、大人にはない発想や建設的な意見も出てくるでしょう。

教師の学びと生徒の学びは相似形。先生方の不安は、たちどころに子どもたちに伝播する一方、先生同士が積極的につながったり、新しいことに挑戦したり、学びを深めていったりすれば、生徒にも少なからぬ影響を与えます。

確かに学校現場は、リスクを取りづらい環境に置かれてきました。しかし、この状況に至っては、リスクを承知で挑戦することの方が、生徒から信頼されるでしょうし、そうした姿から多くを学んでくれると思うのです。先生方の挑戦を通じて、未来の学校は立ち上がるのだと信じています。